

第1回早稲田駅伝 襷贈呈報告レポート

第1回早稲田駅伝学生運営部チャリティチームリーダー
早稲田大学教育学部3年
福井 宏太郎

去る2012年5月20日、第1回早稲田駅伝の開催日から大分遅くなってしまいましたが、イベント当日に参加者の皆様にメッセージを書いていた襷を、三陸鉄道の田野畑駅へ、実際に現地に行って贈呈してまいりました。

盛岡駅から宮古駅までのJR山田線の車窓から見えるのどかな風景は、自然があふれるまさに日本の原風景を感じさせるものでした。一年前、ここで大きな地震があったことなど忘れてしまう位に。

しかし、宮古から田野畑への陸路での移動中、津波の傷跡が至るところにある風景を見て、私は言葉を失うという経験を初めて体験しました。自分の目の前に広がる状況を、ただ茫然と見つめるだけでした。あたり一面何もなく、家があったであろうところには、ただ家の基礎が残っているだけ。

当日は、田野畑駅駅長の根木地徳栄さんに田野畑駅を代表して、イベントに参加された皆様の思いが詰まった襷を受けとっていただきました。

加えて、根木地駅長に田野畑に津波が襲ってきた時のお話を伺うことができました。津波到達時、高台にある田野畑駅の真下まで海水が押し寄せ、周囲の家屋は全壊、そして田野畑駅から島越駅までにかかる陸橋は木端微塵に砕かれたそうです。根木地駅長も津波によって自宅を失いました。現在も三陸鉄道の田野畑駅から普代駅までの区間は依然として不通です。陸橋があったであろう場所には、ぐにゃぐにゃに歪み、途中で途切れた線路が残されていました。

また、震災に関しての行政の意思決定の遅さ、政策と現地の意識との乖離、ボランティアの減少についてのお話を伺う中で、1つとても印象に残る言葉がありました。

「何でみんな死者の多いところが大好きなんだろうね。」

死者の数は関係なく、被災地では復興に向けて尽力しています。被害の傷跡はいたるところに存在しています。

私自身も反省せざるを得ませんでした。

被害の大小はあるけれど、そこで無残にも亡くなった命にはそれぞれ悲しむ方がいて、また小さな一歩でも復興に向けての尽力があるはずで。

しかし、我々は被害の規模だけに注目してしまいがちです。亡くなった方の数の大小で、物事を判断してしまうのはあまりに理不尽ではないでしょうか。

贈呈翌日、私は宮古から南下し、釜石・大船渡・陸前高田に行きました。

街全体を津波が襲って来た地に立った時、震災から1年以上経過しても、360°見渡す限り何もない。これを街と呼んで良いのかはわからないが、街にはただがれきをどかす工事の音しかしない。そして、内陸部であっても、鼻につくぐらいの潮の匂いがする。瓦礫は片付けられつつあるが、残っている瓦礫をよく見ると、家の表札が掛けたものや、茶碗の破片、胡椒の瓶など、そこに確かに生活があった跡がある。

自分がここにはならないような気がして、思わず逃げたくなってしまおうような光景がそこにはありました。まだまだ、復興なんてものは進んでいません。何もない空間で、どうやって新たな街を作り始めるのか。まだ、被災地では目の前のことで精一杯です。

しかし、私たちの記憶の中から震災のことはだんだん遠ざかっていきます。ニュースでも、東日本大震災関連の報道は徐々に減ってきています。

私たちの意識の中から、震災・そして被災地・被災者のことを忘れてしまうのはまだ早すぎます。今現在でも、すべてが失われた空間で、復興、街の未来に向けて戦っておられる方は沢山います。まだ、悲しみに暮れている方も沢山います。

震災前の街の姿を取り戻すのは、2～3年で済むようなことではありません。まだまだ時間がかかります。復旧は進んでいるかもしれませんが、復興など全く進んでいません。

今年の12月に、国立競技場で第2回早稲田駅伝が実施されます。

約5万人もの学生、約58万人もの校友がいる早稲田大学。きっとこの早稲田大学には、早稲田大学にしか出来ない、被災地・被災者に向けての支援があるはずで。

継続した支援が、被災地には必要です。参加者の皆様と一緒に、大学最大のチャリティイベントといっても過言ではないこの早稲田駅伝で、継続した支援を被災地に送る事ができればと思います。我々も全力を尽くします。

まだ企画段階ですが、今年の第2回早稲田駅伝でも、被災地に向けたチャリティイベントを行う予定です。

第2回早稲田駅伝でも、早稲田大学発の継続した支援を、東日本大震災の被災地に送り続けていこうではありませんか!!